The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

印度學佛教學研究第五十八巻第一号　平成二十一年十二月

念仏獨湛の研究
――獨湛の法然観について――

田中実マルコス（芳道）

法然の浄土教は万機普益と言われるように機根の勝劣にかかわりなく一切衆生の平等往生を教義の柱としている。法然は三昧発得の人である善導の『観経疏』を指南とし、罪悪生死の凡夫のための浄土教を構築した。江戸時代に隠元（一五九二～一六七三）と共に来日して浄土念仏教化にも尽くした黄檗山萬福寺第四世獨湛はその編著『扶桑寄帰往生伝』で法然を取り上げ、さらに賛を付している。そのほかに法然や善導の肖像画も描いている。ここでは獨湛が法然をどのように捉えていたかを論じてみたい。

先ず『扶桑寄帰往生伝』の法然の略伝は次のようにある。

源空ハ作州ノ人幼ニシテ以二小矢一射レ冠ヲ中ツ其ノ眉間ニ一十五ニシテ出家。演二雑華諸論一晩ニ見二善導観經ノ疏一乃棄二所業一倡二浄土ノ之宗一開二圓頓ノ大戒一嘉應帝召ノ入レ宮ニ受レ戒ヲ一藤相國問フ二浄土専修一空述二選擇集一呈レ之ヲ相國益〻加二敬信一修念久シク勤妙一観顕一現シ屢〻感ス三樂邦莊嚴等ノ相現スルヲ二于室中一手カラ筆シ自カラ記ス竄セラレテ讃州ニ居ル「五年曰吾不レンハ因ニ遷謫一争テカ布ンヤ専修ノ之道ヲ於海裔ニ乎一化ノ之幸ヲ也回二都城一忽チ染レ疾ニ時ニ紫雲下リ降リ佛菩薩眞身來迎ス面テ西ニ而寂ス年八十[1]

これがその本文であり、末尾には後で引く賛が添えられている。本文は法然の生国、出家の因縁、善導の『観経疏』との出会いを通して諸行を捨て浄土宗を開いたこと、さらに円頓菩薩戒を説いたこと[2]、嘉応帝（高倉天皇）が法然を宮中に招き、授戒の師となしたこと、藤の相国（九条兼実）の要請により『選択集』を著わしたこと、それによって兼実が法然に敬信を深めて行ったこと、口称念仏により三昧を発得したこと、その体験を自ら記した（『三昧発得記』）[3]こと、四国に流罪に遭い、五年後京都に戻ったこと、病に倒れ臨終の時は紫雲が現われ真身の仏菩薩が来迎、面を西に向けて八十歳で寂したことなどを述べている。

この略伝では獨湛がみた法然の求道史が簡潔に述べられている。この略伝は『元亨釈書』第五巻に収められている法然（源空）の条が典拠となっている。

ところで開宗の因縁となった善導『観経疏』に言及する個

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

所での獨湛の記述は「晩見善導観経疏乃棄所業倡浄土之宗」となっている。しかし『元亨釈書』には「晩見信師往生要集乃棄所業倡浄土専念之宗」[4]とある。つまり獨湛は虎関師錬が源信の『往生要集』としたところを善導の『観経疏』と入れ替えている。『往生要集』は法然を善導浄土教に導いた日本浄土教の古典であり、『観経疏』は法然を「選択本願念仏」に導いた西方指南の書である。称名念仏は末法悪世なる当今を生きる愚者、悪人、罪人でも、処や時節を問わずに実践できる勝行であり且つ易行である。それは平等の慈悲に催された阿弥陀仏の本願によりすべての衆生を平等に、速やかに救う法門である。この凡夫でもできる念仏は法然が求めていた出離生死の去行である。獨湛はこの伝記で法然を口称念仏の一行に導いたのは『往生要集』そのものではなく、口称三昧発得の人善導の『観経疏』であることの重要性を示そうとしたのであろう。

法然の伝記の後に獨湛が付している賛は次のようである。

賛曰先佛首楞厳會上呵有相為魔事開喩「後世修禅之者深切著明矣若念佛人依経作観観成則浄境現正與修多羅合如古之遠公歴代諸賢及今之源師是也若暨視浄境為魔事而不知観經所立何趣[1]但是禅観熟煉教義精明之士自能諳此而無偏頗之患焉[5]

すなわち「楞厳会[6]においては、有相を非難して魔事であるとする。（従って）後世、修禅者に（そのことを）開示し、さとすことが懇切であり顕著である。あるいは念仏の人でも経に依って観想し、その観想が成就すれば則ち浄境が顕現する。（それはまた）正しく修多羅の教説と合致する。古の廬山の慧遠や歴代の賢僧たち、そしてこの源空師のごときは、それを感得したのである。あるいはまた、浄境をわずかに見ても魔事とすることがあるが、それは『観経』が立てる観想の趣旨を知らないからである。禅観を熟練し、その教義に精通した人であれば、自らそのことをさとり、偏頗のわずらいなどないのにちがいない」と述べ、廬山の慧遠を祖と仰ぐ蓮宗の九祖の一人に数えられる、禅浄同帰を説いた袾宏（一五三五～一六一五）に親しんでいた。

ところで獨湛は「讀雲棲大師諸書有感」[7]と語録に述べている。その雲棲袾宏の『佛説阿彌陀經疏鈔』[8]巻第四の冒頭に、『佛説阿彌陀經』の「其人臨命終時。阿彌陀佛。與諸聖衆。現在其前」に対する註釈の中で魔事について次のような問答を出している。

問臨終佛現亦有魔否答古謂無魔脱或有之貴在辨識

つまり、「臨終に佛が来現することに関して、その折、魔はあるのかそれともないのかといえば、古徳の謂うところによれば魔はないが、もしかして魔があることもある。どちら

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

なのかはそのことについての道理を理解することが大事である」。これに対する袾宏の自註は次のようなものである。

無魔トハ者單ヘニ修スルニ禪定ヲ或ハ起ス陰魔ヲ如キ楞嚴止觀諸經論ノ中ニ辨スル「之ヲ甚タ悉ナリ今謂ル念佛スル者ノハ佛ノ威神力佛ノ本願力大光明ノ中ニハ必ス無ニ魔事ニ然トモ亦タ有レハ宿障深厚ニメ或ハ不ル善ク用ヒ心容シ有ル魔起ニ固トニ未タ可レ定須ク預メ辨識ス如キ經論ニ說カ行人ノ見仏辨スルニ之ヲ有リ一ノ一ニハ不ル與ニ脩多羅ニ合セ者ノ是ヲ為ニ魔事ト一ニハ不ル與ニ本所修ニ合セ者ノ是ヲ為ニ魔事ト所ニ以然ル者以下單ヘニ修スル禪ヲ人ハ本所修ノ因唯心ニメ無ヲ境故ニ外ニ有ルハ佛現ニ悉ク置テ不レ論以テノ果不ルヲ協ハ因ニ故ニ今念佛人ハ一生憶フ佛ヲ臨終ノ見佛ハ因果相符何ノ得ノミ(9)三槩子スルコトヲ為ニ魔事ト若シ或ハ未タ能ハ了決ノ但タ如ク前ノ辨別察識而已

つまり「無魔とは、単えに禅定を修する折に陰魔（五蘊魔）が起こることがある。たとえば楞厳、止観、諸の経論の中にはそれを細かくとりあげている。念仏する者は仏の威神力、仏の本願力、大光明の中にいるので決して魔事などはない。また宿障が深厚であって、心を善く用いることができず、魔が起こることがある。確かに魔が起こるのか、起こらないのか、決定することはできない。だからあらかじめ、よく魔の有無についての道理を理解しておくべきだ。経論に説くように、行人の見仏について論じるとすれば二つある。一つには、脩多羅と相応しないものは魔事である。二つには、〔念仏や念仏三昧の〕本所修と合わないものも魔事である。その所以は、単えに禅を修する人の本所修の因は唯心観であるので、境無きことを宗とする。だから外に佛が現れることについてはすべてさし置いて論じない。行果が行因とあわないためである。今の念仏人が一生佛を憶って、臨終に見仏するのは因果が相応するからである。どうしておおまかにそれを（浄境を）魔事とすることができようか。まだそのことが了決できていなければ、前の如くそのことについての道理をよく理解しておくことが肝要である」と述べている。

袾宏の『佛說阿彌陀經疏鈔』巻上では修禅者には四魔（煩悩魔、五陰魔、死魔、天魔）の中の五陰魔が起ることが、『首楞嚴經』(10)と『摩訶止觀』巻第八(11)などによりながらとり挙げられている。一方で袾宏は、念仏者は仏の願力によって光明を蒙るが、その光明の中には魔事がないことを述べている。

ところで袾宏は霊芝元照（一〇四八～一一一六）の『觀無量壽佛經義疏』巻上に依って、「今引ニ衆說ニ以絶ニ群疑ニ一云大光明中決無ニ魔事ニ猶如ニ白晝姦盜難ニ成（中略）資中疏云若シ修スレハ念佛三昧ヲ此ノ境現前ノ與ニ修多羅ニ合セハ名テ為ニ正相ト若シ修セハ餘觀ヲ設ヒ見トモ佛形ニ亦タ不レ爲レ正ト以ノ心境不ルヲ相應ニ故」(12)と光明中に魔事なきことを説き、また「修多羅合」については、唐僧弘沇の『資中疏』(13)に依っての念仏三昧を修するものには〔浄〕境が現前することを説いている。その浄境は経典に合うから正相である。しかし余観を修すれば仏形を見れども正相ではないとし、それは心と境が相応していないからである

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

と述べている。

獨湛は修多羅に相応した浄境の現前は魔事ではないことを述べるにあたって慧遠[14]、歴代の諸賢、また法然も同じく念仏三昧を発得したことを述べている。慧遠の場合は『般舟三昧経』による念仏三昧であり、法然の場合は善導の『観経疏』を指南とする口称念仏三昧であるが、いずれも修多羅と相応した浄境の現前であり、経に基づくそれぞれの三昧の特質が理解ができていれば、浄境現前を魔事と誤解することもないというのである。

獨湛が法然への賛の中で触れた魔事のことは、中国浄土教典籍では臨終来迎における浄境の現前をめぐってとりあげられるのであるが、獨湛は臨終という時の問題については触れていない。それは念仏三昧による浄境の現前が臨終、平生の双方において成就されるものであることを意識してのことであったと考えられる。

1　酉谷寺文庫所蔵『扶桑寄帰往生伝』巻上十六左～十七右。

2　「開(ク)円頓ノ大戒ヲ」、『元亨釈書』巻第五「円頓菩薩の大戒を説(く)」とある。

3　『元亨釈書』巻第五には「手レ筆自記曰。建久九年正月一日。修二一七念佛。」(『新訂増補国史大系』三十一巻・92)とある。『三昧発得記』には「建久九年正月一日…」(『昭法全』863)。

4　『元亨釈書』第五「晩見二信師往生要集一。乃棄二所業一倡(トナフ)二浄土専念宗一」(『新訂増補国史大系』三十一巻・92)。

5　酉谷寺文庫所蔵『扶桑寄帰往生伝』巻上十七右。

6　楞厳会とは、叢林で「楞厳呪」を読誦して衆僧の安居の無事円成を祈念する法会(『禅学大辞典』)。

7　『獨湛禪師梧山舊稿』巻第三、六丁右(黄檗文華殿所蔵)。

8　『佛説阿彌陀經疏鈔』巻第一には「株宏・末法下凡窮陬脱学」と末法の下凡を自ら称している。

9　『卍続蔵』二十二巻665a。

10　『大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經』巻第十(『正蔵』十九巻152b)。

11　『正蔵』四十六巻115b。

12　『正蔵』三十七巻283c～284a、『浄全』五巻363下。

13　『宋高僧伝』『正蔵』五十巻783cによると『首楞嚴經』の註釈書である。戒度『霊芝観経義疏正観記』巻中(『浄全』五巻462上)、元照『觀無量壽佛經義疏』(『浄全』五巻365～366)。

14　『選択集』第一章には「浄土一宗において、諸家また同じからず。所謂廬山の慧遠法師と、慈愍三蔵と、道綽、善導、これなり」と浄土一宗を三流に分けているが、獨湛は「如(キ)二古ノ之遠公歴代ノ諸賢及ヒ今ノ之源師ノ是ヲ也」と言って廬山の慧遠と法然を同じように扱っている。つまり禅僧からみた慧遠と法然は念仏により三昧発得、の人を一つの流として見ていたであろう。

〈キーワード〉『扶桑寄帰往生伝』、禅浄、黄檗、浄土

(佛教大学大学院)

NII-Electronic Library Service